

研究拠点形成事業
平成26年度 実施報告書
B.アジア・アフリカ学術基盤形成型 (※)

(※ 該当しない交流形態を削除してください。)

1. 拠点機関

日本側拠点機関:	早稲田大学
(カンボジア) 拠点機関:	プノンペン王立芸術大学
(ベトナム) 拠点機関:	フエ大学
(ラオス) 拠点機関:	ラオス国立大学
(タイ) 拠点機関:	シラパコーン大学
(ミャンマー) 拠点機関:	マンダレー工科大学

2. 研究交流課題名

(和文): メコン川流域国における文化遺産の保存活用学の形成

(交流分野: 文化財科学)

(英文): Establishment of the Network for Safeguarding and Development of the Cultural Heritage in the Mekong Basin Countries

(交流分野: Heritage Science)

研究交流課題に係るホームページ: <http://mekong.lah-waseda.jp>

3. 採用期間

平成25年4月1日 ~ 平成28年3月31日

(2年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関: 早稲田大学

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名): 早稲田大学・総長・鎌田薫

コーディネーター (所属部局・職・氏名): 早稲田大学理工学術院・教授・中川武

協力機関: 東京大学、奈良文化財研究所、東京文化財研究所

事務組織: 早稲田大学国際部国際課

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名: カンボジア

拠点機関：(英文) Royal University of Fine Art

(和文) プノンペン王立芸術大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Faculty of Architecture and Urbanism・Dean (Professor)・CHHING Chhommony

協力機関：(英文) APSARA Authority (Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap)

(和文) アプサラ機構

(英文) Norton University

(和文) ノートン大学

(英文) Ministry of Culture and Fine Arts

(和文) 文化芸術省

(2) 国名：ベトナム

拠点機関：(英文) Hue University

(和文) フエ大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Department of Architecture, Hue University of Science・Lecturer・NGUYEN Tu Nhu

協力機関：(英文) Hue Monuments Conservation Center

(和文) フエ遺跡保存センター

(3) 国名：ラオス

拠点機関：(英文) National University of Laos

(和文) ラオス国立大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Faculty of Architecture・Associate Professor・CHITHPANYA Soukanh

(4) 国名：タイ

拠点機関：(英文) Silpakorn University

(和文) シラパコーン大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Faculty of Archaeology・Associate Professor・SURAPOL Natapintu

協力機関：(英文) Ubon Ratchathani University

(和文) ウボン・ラチャタニ大学

(英文) Chulalongkorn University

(和文) チュラロンコン大学

(英文) Ministry of Culture

(和文) 文化省

(5) 国名：ミャンマー

拠点機関：(英文) Mandalay Technological University

(和文) マンダレー工科大学

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：(英文) Department of Architecture, Mandalay Technological University・Head (Professor)・Su Su

協力機関：(英文) Yangon University

(和文) ヤンゴン大学

5. 研究交流目標

5-1. 全期間を通じた研究交流目標

ユネスコ世界遺産には現在約 900 件のサイトが記載されている。185 ヶ国にのぼる条約締結国数からも、最も成功した世界条約の一つといわれ、登録を目指す動きは加熱の一方で、アジア・アフリカ等の途上国や新しい考え方による遺産の記載は増加が予想されている。記載実現のためには、その固有の価値とともに、顕著な普遍的価値の証明や保護体制の構築などが必要であり、また記載を目指す運動自体が、必然的に地球的広がりや人類史的な長期的視点からの遺産と地域の結びつきを見つめ直すきっかけとなる。記載後も遺産の保存活用のための人材育成が必要であり、多角的な国際協力体制の実現が求められている。環境・災害・食糧・資源・格差・紛争等の 21 世紀的世界の危機の深刻化の中で、遺産研究が地域や国の歴史文化の理解にとって不可欠であり、その保存・再生が疲弊した社会の復興の礎となり、人々の精神的一体性の源泉である公共空間回復に寄与すること、そして保護のための国際協調活動が、国際交流と平和構築に大きな役割を果たすことの期待がその背景にある。申請者らはこれまでにカンボジアやベトナムを中心として調査研究・保存・修復と、災害から地域や文化遺産を救済し、復興させることにより、高い評価を得た活動実績がある。これらの実績を基礎として、メコン川流域の諸国においてその地域的背景のもとに文化遺産の保存活用学を創成することを目標とする。同地域には、歴史・地理的背景を共有する多くの文化遺産保存事業サイト、そして将来的に世界遺産リスト申請の可能性があるサイトやそれと同等の歴史的価値を有するサイトと密接かつ多角的な協力のもとに連携した本拠点を中心に国際的な教育研究のネットワークを構築し、高度な専門性と豊かな構想力を持ち、文化遺産の保存を核とした参加・持続型社会の構築を担う人材の育成を行おうとするものである。

5-2. 平成 26 年度研究交流目標

本研究拠点形成事業が対象とする地域は、アジア・モンスーン地帯であり、近年発展がめざましいとはいえ、まだまだ発展途上国に位置づけられる。これらの国々は、ヨーロッパ的文化遺産の保存概念より、日本が長年培ってきた近代遺産のオーセンティシティ（真正性）を重視した上での、使いながら保存する考え方や技術が有効である。日本的な文化遺産保存活用学の蓄積を基礎として、多くの専門分野からなる複合領域を横断し、文化遺産を活用した社会発展に貢献し得る人材の育成を、前年度から引き続き、平成 26 年度の研究

交流を通しての共通目標としたい。以下、具体的に各項目について記載する。

<研究協力体制の構築>

文化遺産の保存活用をめぐる各国の固有かつ主要な研究課題に対する日本と各国拠点機関の二国間協力を基礎として、メコン川流域全体に共通して取り組むべき研究協力体制を同時に構築する。平成 26 年度は、ラオス及びカンボジアの二国と日本側機関との研究協力体制の強化、及びその二国で開催するセミナーを通じた参加国相互の研究協力体制のネットワーク構築を行うことを目指す。

<学術的観点>

各国各地域とも、各々の文化遺産の保存および活用方法には伝統的、社会的特質がある。それを学術的に明らかにするとともに、特に保存と活用の関係について、共通する考え方や手法について議論する中で、メコン川流域に共通する文化遺産の保存活用学の構築に向けて、相互協力の方向を集約する。特に、ラオス及びカンボジアで開催予定のセミナーにおいて、両国を代表する世界文化遺産（ワット・プー遺跡とアンコール遺跡）を中心事例として、メコン川流域共通の文化的背景と地域固有の文化的背景の比較を通じた学術交流と、その成果に基づいた文化遺産の保存活用の可能性を明らかにすることを目指す。

<若手研究者育成>

研究交流に若手研究者の参加を積極的に推進し、調査現場やセミナー等での議論、さらにフォーラム誌の発行企画、及びそこへの投稿を通して、彼らの育成をはかる。平成 26 年度は、ラオスとカンボジアで、参加国の学術機関の研究者を中心に、保存修復の現場技術者、さらに行政機関の文化遺産担当者まで、多方面から文化遺産の保存活用に携わる若手人材の参加を促すことで、文化遺産の保存活用学の形成を通じた人的ネットワーク形成と多角的視点の養成、そして実践的な学術研究活動発表の場の提供を行うことを目指す。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

セミナー及びフォーラム誌の発行を中核として、各国の固有性と地域の共通性の課題に、各々の社会に意識を高めることを目標とする。特に、各セミナー成果のオンライン公開をはじめとして、本事業の内容を広く社会一般に公開することで、文化遺産の現状、課題、及びその可能性を認知してもらえらる機会を設ける。

6. 平成 26 年度研究交流成果

（交流を通じての相手国からの貢献及び相手国への貢献を含めてください。）

6-1 研究協力体制の構築状況

平成 26 年度は、本事業 2 年度目に当たる。前年度の基本的な研究協力体制の構築の成果を基に、ラオス及びカンボジアの二国と日本側機関との研究協力体制の強化、及びその二国で開催するセミナーを通じた参加国相互の研究協力体制のネットワーク構築を行った。

具体的には、カンボジアのプノンペンでのセミナー（整理番号 S-3、2014 年 8 月開催）、ラオスのワット・プーでのセミナー（整理番号 S-1、2014 年 12 月）、カンボジアのシェムリアップでのセミナー（整理番号 S-2、2015 年 2 月開催）において、参加国側の現地機関と日本側との相互連携の体制を強化した。

特に、プノンペンでのセミナーでは、カンボジア文化芸術省やユネスコ・プノンペン支局とこれまでの協力体制を確認しつつ、ユネスコ世界遺産登録への最終調整の課題検討という共同作業を通して、これまで以上の確実な協力体制を構築できたといえる。ワット・プーでのセミナーでは、ラオス国立大学のみならず、フランス極東学院（EFEO）や他国の国際修復チーム、そして本事業参加国の研究機関と、クメール遺構のワークショップ・実地研修を通して、確実な協力体制を築くことができた。また、シェムリアップのセミナーでは、アンコール・ワットやバイヨンといった代表的なクメール古代遺跡だけでなく、カンボジアの近代遺産を含めた文化遺産保存の協力体制を現地アプサラ機構と構築することができた。

以上のように、本年は前年度の全体的成果を基に、より具体的な個別事例を通して日本＝相手国の関係のみならず、相手国間の相互連携強化を図った。

6-2 学術面の成果

各国各地域とも、各々の文化遺産の保存および活用方法には伝統的、社会的特質がある。本事業では、3年間の活動を通してこの点を学術的に明らかにすることを目指している。初年度に収集・議論した各国の文化遺産の保存活用の事例と課題を基に、本年度は、ラオスのワット・プーとカンボジアのプノンペン及びシェムリアップでセミナーを開催した。プノンペンでのサンポー・プレイ・クック遺跡に関するセミナーでは、カンボジア三番目の世界遺産となることが予想される当該遺跡について、これまでの約 20 年におよぶ早稲田大学がカンボジア各種機関と連携して行ってきた修復活動・調査研究の成果を世界遺産登録の実践的過程を通して、更なる深化を行うことができた。ラオスのワット・プー遺跡でのセミナーでは、本事業参加国のみならず、国際修復チームとの文化遺産の保存活用について、様々な側面からの議論を行うことに成功し、修復技術担当者から政府関係者までの幅広い層の参加者との議論を基に、文化遺産活用の基礎でもある保存修復の学術・技術分野において、非常に重要な成果を得ることができた。年度末のカンボジア・シェムリアップでのセミナーでは、アンコール遺跡と近代遺産の総合的な文化遺産の保存活用という視点に立ち、平成 25 年度からの共同研究を基に、セミナーを開催し、新旧の文化遺産それぞれの価値を尊重した保存活用の基本的な方法とその可能性を確認することができた。またあわせて、平成 25 年度から引き続き、早稲田大学にて行っている既存の各種事業（カンボジアやベトナム）と情報共有等の学術的な連携を進めた。

以上より、研究協力体制の基盤強化と、メコン川流域のクメール遺跡という類似的歴史的背景を持った 3 つの文化遺産を事例として、現在の各遺跡が置かれている異なる状況を踏まえた学術活動を行い、最終年度となる次年度のセミナー開催実現へ向けた、各国の文化遺産の保存活用の現況の把握と、相手国側との学術情報の共有を積極的に行った。

6-3 若手研究者育成

若手研究者育成では、本事業に於ける共同研究の交流への参加を積極的に推進し、現場調査やセミナー等での議論、さらにセミナー・プロシーディングや本事業に関連する研究会誌の発行と、そこへの投稿を通して、彼らの育成を図ることを事業全体の目標としている。今年度においては目標に掲げたとおり、ラオスとカンボジアで開催したセミナーで、参加国の学術機関の研究者を中心に、保存修復の現場技術者、さらに行政機関の文化遺産担当者まで、多方面から文化遺産の保存活用に携わる若手人材の参加を促すことで、文化遺産の保存活用学の形成を通じた人的ネットワーク形成と多角的視点の養成、そして実践的な学術研究活動発表の場の提供を確実に行うことができたとともに、若手研究者間の積極的な相互交流と連携強化を図った。

また、ベトナムとカンボジアにおいては、既存の早稲田大学の他事業との連携を図り、より広く若手研究者の活動の場を提供できるよう、現地調査の派遣や現場での調査研究活動報告会等の開催に努めた。

以上のように、本事業と他事業との学術的な連携強化と併せて、若手研究者の育成においても、日本側と相手国側とで、相互の交流促進を効果的に行うことができた。

6-4 その他（社会貢献や独自の目的等）

セミナー・プロシーディング及び調査研究成果の報告集の発行を主に 2 カ国語（日・英）で行うことで、各国の固有性と地域の共通性の課題について、日本側及び相手国側においても文化遺産の保存活用に対する意識を高めることを図った。また、昨年度 12 月には、本事業相手国拠点機関の一つであるタイのシラパコーン大学が独自に本事業のテーマを受け継ぎ国際シンポジウムを開催しており、当該シンポジウムには当事業参加の主要研究者も招待され、本事業における共同研究やセミナーが目指すメコン川流域の文化遺産保存活用を核としたネットワーク形成が、広くメコン川流域各国へ受け入れられ、国際的な学術機関相互の協力が育ちつつあることの一例であると言える。さらに、一昨年度開設した本事業独自のウェブサイトでも、昨年度の成果を順次公開できるよう成果のまとめを行っている。

6-5 今後の課題・問題点

平成 26 年度は、本事業の参加国のうちの二ヶ国（ラオスとカンボジア）にて、合計 3 回の国際ワークショップ・セミナーを開催した。

これらのセミナーと通年を通じた共同研究から、メコン川流域国の文化遺産が直面する共通の課題としての大きな枠組みを基にした、それぞれの国・地域が有する固有の価値や問題が徐々に明らかになりつつあるが、そうした問題の実際的な解決法または現実的な保存活用事業への展開の方法に対する検討がさらに必要であることが今後の課題として明らかとなった。また、同時に、「メコン川流域」のより広い範囲での検討も当該研究テーマのさらなる深化のための課題の一つであることが明らかとなった。

最終年度となる平成 27 年度では、これまで行ってきたメコン川流域の文化遺産の地理的・歴史的・民族的・宗教的な検討をさらに発展させ、メコン川の最上流域にあたる中国南部を含めた調査研究活動を共同研究の一テーマとし、一方で、セミナーにおいては、一つの個別事例（シェムリアップの近代遺産とアンコール遺跡）を扱うことで、メコン川流域国の文化遺産の保存活用へ展開可能な手法の探求を行い、その学術的基礎を固めるとともに、その過程での相互協力体制の強化と人材育成を継続して行っていく予定である。

6-6 本研究交流事業により発表された論文

平成 26 年度論文総数 2 本

相手国参加研究者との共著 0 本

(※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。)

(※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。)

7. 平成26年度研究交流実績状況

7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成25年度	研究終了年度	平成27年度
研究課題名	(和文) メコン川流域国における文化遺産の保存活用学の形成				
	(英文) Establishment of the Network for Safeguarding and Development of the Cultural Heritage in the Mekong Basin Countries				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 中川武・早稲田大学理工学術院・教授				
	(英文) NAKAGAWA Takeshi・Faculty of Science and Engineering, Waseda University・Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(カンボジア) CHHING Chhommony・Faculty of Architecture and Urbanism, Royal University of Fine Art・Dean				
	(ベトナム) NGUYEN Tu Nhu・Department of Architecture, Hue University of Science・Lecturer				
	(ラオス) CHITHPANYA Soukanh・Faculty of Architecture, National University of Laos・Associate Professor				
	(タイ) SURAPOL Natapintu・Faculty of Archaeology, Silpakorn University・Associate Professor				
	(ミャンマー) Su Su, Department of Architecture, Mandalay Technological University・Head (Professor)				
参加者数	日本側参加者数	10名			
	(カンボジア) 側参加者数	5名			
	(ベトナム) 側参加者数	3名			
	(ラオス) 側参加者数	1名			
	(タイ) 側参加者数	3名			
	(ミャンマー) 側参加者数	2名			
26年度の研究 交流活動	日本側コーディネーターが、継続して各国の中心的課題である文化遺産の現場を、当該国コーディネーターと共同で調査し、各々の課題と問題点の解決へ向けて協議を重ねた。また、ラオス及びカンボジアでのセミナー開催に向けた、より具体的な現場調査と研究を行い、問題点と可能性を明らかにした。また、共同研究の成果の一部を第三国(中国)での国際学会での発表も行った。				

<p>26年度の研究 交流活動から得 られた成果</p>	<p>「メコン川流域国における文化遺産の保存活用学の形成」の研究課題の各国個別の具体的な課題を明らかにし、その成果を基にラオス、カンボジアにおいてセミナー、ワークショップを開催することで、共同調査研究の学術的テーマを広く実践的な課題との関係で議論、発展させることができた。また、他事業による研究者間の共同研究や研究者間交流と連携することで、ミャンマー・バガンにおける文化遺産と観光開発、カンボジアのアンコール遺跡を中心とした保存修復・調査研究、ベトナムの貴族住宅や王宮建築の保存修復・調査研究、タイにおけるアンコール関連遺跡の現況、中国におけるメコン川流域国との歴史的関係性、など、多くの基礎的資料の収集と学際的な意見交換を行うことができた。同時に、共通の課題を解決するための協力体制のさらなる強化を行った。</p> <p>以上より、文化遺産保存活用学の形成へ向けた基礎的枠組みを、今年度の共同研究及び交流活動により、確実に構築することができ、次年度の共同研究やセミナーの下地を築くことができた。</p>
--------------------------------------	--

7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「メコン川流域国における文化遺産の保存活用学の形成—世界遺産ワット・プー遺跡に於ける保存修復技術を通じた人材育成とその関連課題の検討—」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Establishment of the Network for Safeguarding and Development of the Cultural Heritage in the Mekong Basin Countries - Human Resources Development and its Major Issues through Technical Activities of Restoration and Conservation in the World Heritage Site Vat Phou - “
開催期間	平成26年12月26日 ~ 平成26年12月30日 (5日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) ラオス、チャンパスック、ワット・プー博物館 (英文) Laos, Champassack, Vat Phou Museum
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 中川武・早稲田大学理工学術院・教授 (英文) NAKAGAWA Takeshi・Faculty of Science and Engineering, Waseda University・Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文) CHITHPANYA Soukanh・National University of Laos・Associate Professor

参加者数

派遣先 派遣	セミナー開催国 (ラオス)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	2/ 14	2
カンボジア 〈人/人日〉	5/ 35	0
ベトナム 〈人/人日〉	1/ 8	0
ラオス 〈人/人日〉	2/ 16	20
タイ 〈人/人日〉	2/ 14	1
ミャンマー 〈人/人日〉	0/ 0	0
合計 〈人/人日〉	12/ 87	23

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ラオスにおける文化遺産の歴史的、社会的現状の確認。 ・その保存活用のための学術研究上の課題の現状。 ・当該国において文化遺産の保存活用の社会的位置付けと意義。 ・文化遺産保存活用学形成のための当該地域の連携上の可能性。 <p>以上の各点を、各参加者の発表を基に討議し、今後の解決のための協力のあり方を提案する。</p>																						
<p>セミナーの成果</p>	<p>本セミナーでは、ラオス国立大学、フランス極東学院（EFEO）、ラオスのワット・プー修復事業担当するフランス外務省基金のラオス支局との共同で国際ワークショップ・セミナーを開催した。これらの活動を通して、主に以下の3つの項目が、本事業の成果として挙げられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ラオスの文化遺産ワット・プー遺跡を事例として、歴史的・基礎的学術研究、保存修復究体制の現状と問題点が明らかとなった。 ・本セミナーを中心に、ラオスにおける研究体制及び参加国間の相互協力、さらに参加国以外との協力体制の構築とさらなる強化・発展が実現し、今後の国際協力事業等への足がかりを築いた。 ・研究者のみならず、修復作業の担当者までを含めたワークショップやセミナーにより、調査研究と修復技術の検討を実践的に行うことができた。 																						
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>早稲田大学国際部、理工学総合研究所の事務的支援の基に、運営の実務は、相手国研究拠点であるラオス国立大学と早稲田大学総合研究機構ユネスコ世界遺産研究所および理工学術院建築学科中川武研究室がその緊密な協力のもとに担当した。</p>																						
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="370 1424 568 1738"> <p>日本側</p> </td> <td data-bbox="568 1424 1375 1738"> <table border="1"> <thead> <tr> <th>内容</th> <th>金額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>外国旅費（日本側）</td> <td>612,380 円</td> </tr> <tr> <td>外国旅費（日本以外ラオス一部除く）</td> <td>757,272 円</td> </tr> <tr> <td>備品・消耗品購入費</td> <td>6,363 円</td> </tr> <tr> <td>その他経費</td> <td>227,968 円</td> </tr> <tr> <td>外国旅費・謝金等に係る消費税</td> <td>48,990 円</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">合計</td> <td>1,652,973 円</td> </tr> </tbody> </table> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="370 1738 568 1971"> <p>(ラオス) 側</p> </td> <td data-bbox="568 1738 1375 1971"> <table border="1"> <thead> <tr> <th>内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>セミナー会場提供</td> </tr> <tr> <td>ラオス国内研究者旅費</td> </tr> <tr> <td>レセプション経費（一部）</td> </tr> </tbody> </table> </td> </tr> </table>	<p>日本側</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>内容</th> <th>金額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>外国旅費（日本側）</td> <td>612,380 円</td> </tr> <tr> <td>外国旅費（日本以外ラオス一部除く）</td> <td>757,272 円</td> </tr> <tr> <td>備品・消耗品購入費</td> <td>6,363 円</td> </tr> <tr> <td>その他経費</td> <td>227,968 円</td> </tr> <tr> <td>外国旅費・謝金等に係る消費税</td> <td>48,990 円</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">合計</td> <td>1,652,973 円</td> </tr> </tbody> </table>	内容	金額	外国旅費（日本側）	612,380 円	外国旅費（日本以外ラオス一部除く）	757,272 円	備品・消耗品購入費	6,363 円	その他経費	227,968 円	外国旅費・謝金等に係る消費税	48,990 円	合計	1,652,973 円	<p>(ラオス) 側</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>セミナー会場提供</td> </tr> <tr> <td>ラオス国内研究者旅費</td> </tr> <tr> <td>レセプション経費（一部）</td> </tr> </tbody> </table>	内容	セミナー会場提供	ラオス国内研究者旅費	レセプション経費（一部）
<p>日本側</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>内容</th> <th>金額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>外国旅費（日本側）</td> <td>612,380 円</td> </tr> <tr> <td>外国旅費（日本以外ラオス一部除く）</td> <td>757,272 円</td> </tr> <tr> <td>備品・消耗品購入費</td> <td>6,363 円</td> </tr> <tr> <td>その他経費</td> <td>227,968 円</td> </tr> <tr> <td>外国旅費・謝金等に係る消費税</td> <td>48,990 円</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">合計</td> <td>1,652,973 円</td> </tr> </tbody> </table>	内容	金額	外国旅費（日本側）	612,380 円	外国旅費（日本以外ラオス一部除く）	757,272 円	備品・消耗品購入費	6,363 円	その他経費	227,968 円	外国旅費・謝金等に係る消費税	48,990 円	合計	1,652,973 円								
内容	金額																						
外国旅費（日本側）	612,380 円																						
外国旅費（日本以外ラオス一部除く）	757,272 円																						
備品・消耗品購入費	6,363 円																						
その他経費	227,968 円																						
外国旅費・謝金等に係る消費税	48,990 円																						
合計	1,652,973 円																						
<p>(ラオス) 側</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>セミナー会場提供</td> </tr> <tr> <td>ラオス国内研究者旅費</td> </tr> <tr> <td>レセプション経費（一部）</td> </tr> </tbody> </table>	内容	セミナー会場提供	ラオス国内研究者旅費	レセプション経費（一部）																		
内容																							
セミナー会場提供																							
ラオス国内研究者旅費																							
レセプション経費（一部）																							

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「メコン川流域国における文化遺産の保存活用学の形成—世界遺産アンコール遺跡を通じた保存活用学の現代的課題の検討とその確認—」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Establishment of the Network for Safeguarding and Development of the Cultural Heritage in the Mekong Basin Countries – Current Issues of Restoration and Conservation Activities in World Heritage Site Angkor -“
開催期間	平成27年2月23日 ～ 平成27年2月25日 (3日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) カンボジア、シェムリアップ、ユネスコ・JASA シェムリアップ事務所 (バイヨン・インフォメーション・センター) (英文) Cambodia, Siem Reap, UNESCO/JASA Siem Reap Office (Bayon Information Center)
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 中川武・早稲田大学理工学術院・教授 (英文) NAKAGAWA Takeshi・Faculty of Science and Engineering, Waseda University・Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) SO Sokuntheary・Norton University・Professor

参加者数

派遣先 派遣	セミナー開催国 (カンボジア)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	5/ 25	8
カンボジア 〈人/人日〉	5/ 15	15
ベトナム 〈人/人日〉	0/ 0	0
ラオス 〈人/人日〉	0/ 0	0
タイ 〈人/人日〉	0/ 0	0
ミャンマー 〈人/人日〉	0/ 0	0
合計 〈人/人日〉	10/ 40	23

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的	<ul style="list-style-type: none"> ・カンボジアにおける文化遺産の歴史的、社会的現状の確認。 ・その保存活用のための学術研究上の課題の現状。 ・当該国において文化遺産の保存活用の社会的位置付けと意義。 ・文化遺産保存活用学形成のための当該地域の連携上の可能性。 <p>以上の各点を、各参加者の発表を基に討議し、今後の解決のための協力のあり方を提案する。</p>													
セミナーの成果	<p>本セミナーでは、数日間の事前のワークショップ・現地調査を基に、アンコール遺跡保存修復の一つの拠点でもあるバイヨン・インフォメーションセンター（BIC）で、現地関係者や一般市民を招いてセミナーを行った。これらの活動を通して、主に以下の4つの項目が、本事業の成果として挙げられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カンボジアにおける新旧の文化遺産（アンコール遺跡とシェムリアップ歴史地区）の歴史的・基礎的学術研究上の現状と問題点の明確化。 ・シェムリアップにおける近代遺産を中心に据えたアンコール遺跡全体の保存活用の可能性の明確化。 ・観光やアミューズメント開発、防災・安全対策を踏まえた文化遺産保存活用の可能性と課題の検討。 ・カンボジアの研究体制との相互協力のさらなる強化と発展。 													
セミナーの運営組織	<p>早稲田大学国際部、理工学総合研究所の事務的支援の基に、運営の実務は、相手国責任者の所属大学であるノートン大学と早稲田大学総合研究機構ユネスコ世界遺産研究所および理工学術院建築学科中川武研究室がその緊密な協力のもとに担当した。</p>													
開催経費 分担内容 と金額	日本側	<table border="1"> <thead> <tr> <th>内容</th> <th>金額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>外国旅費（日本側）</td> <td>801,400 円</td> </tr> <tr> <td>備品・消耗品購入費</td> <td>150,552 円</td> </tr> <tr> <td>その他経費</td> <td>197,261 円</td> </tr> <tr> <td>外国旅費・謝金等に係る消費税</td> <td>64,112 円</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">合計</td> <td>1,213,325 円</td> </tr> </tbody> </table>	内容	金額	外国旅費（日本側）	801,400 円	備品・消耗品購入費	150,552 円	その他経費	197,261 円	外国旅費・謝金等に係る消費税	64,112 円	合計	1,213,325 円
	内容	金額												
外国旅費（日本側）	801,400 円													
備品・消耗品購入費	150,552 円													
その他経費	197,261 円													
外国旅費・謝金等に係る消費税	64,112 円													
合計	1,213,325 円													
(カンボジア) 側	<table border="1"> <thead> <tr> <th>内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>セミナー会場提供</td> </tr> <tr> <td>カンボジア国内研究者旅費</td> </tr> </tbody> </table>	内容	セミナー会場提供	カンボジア国内研究者旅費										
内容														
セミナー会場提供														
カンボジア国内研究者旅費														

整理番号	S-3
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「メコン川流域国における文化遺産の保存活用学の形成—サンボア・プレイ・クック遺跡における保存修復活動とユネスコ世界遺産登録へ向けた取り組みの課題と展望—」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Establishment of the Network for Safeguarding and Development of the Cultural Heritage in the Mekong Basin Countries –Sambor Prei Kuk Monument: Research and Conservation Works for Nominating to the UNESCO World Heritage Site -“
開催期間	平成26年8月19日 ~ 平成26年8月19日 (1日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) カンボジア、プノンペン、文化芸術省ホール (英文) Cambodia, Phnom Penh, Ministry of Culture and Fine Arts, Main Hall
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 中川武・早稲田大学理工学術院・教授 (英文) NAKAGAWA Takeshi・Faculty of Science and Engineering, Waseda University・Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) SO Sokuntheary・Norton University・Professor

参加者数

派遣先 派遣	セミナー開催国 (カンボジア)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	3/3	4
カンボジア 〈人/人日〉	3/3	45
ベトナム 〈人/人日〉	0/0	0
ラオス 〈人/人日〉	0/0	0
タイ 〈人/人日〉	0/0	0
ミャンマー 〈人/人日〉	0/0	0
合計 〈人/人日〉	6/6	49

- A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)
B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・サンボー・プレイ・クック遺跡の歴史的、社会的現状の確認と、保存活用のための学術研究上の現状と課題。 ・当該遺跡のユネスコ世界遺産登録へ向けた手続きと課題。 ・カンボジアおよびメコン川流域国における文化遺産保存活用の枠組に於ける当該遺跡の社会的位置付けと意義。 <p>以上の各点を、各参加者の発表を基に討議し、今後の解決のための協力のあり方を提案する。</p>													
<p>セミナーの成果</p>	<p>本セミナーは、ノートン大学及びカンボジア文化芸術省と共同で、早稲田大学がこれまでに行ってきたサンボー・プレイ・クック遺跡の保存修復事業の報告とカンボジア政府が進めるユネスコ世界遺産登録へ向けた課題検討を、主に現地関係者を招いて行った。これらの活動を通して、主に以下の3つの項目が、本事業の成果として挙げられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サンボー・プレイ・クック遺跡において行われてきたこれまでの歴史的・基礎的学術研究上の現状と問題点の明確化。 ・世界遺産登録手続き準備を通じた、カンボジアにおける研究体制及び産学官の相互協力のさらなる強化と発展。 ・ユネスコ世界遺産の国際的枠組とメコン川流域国の文化遺産保存活用学の連携可能性とその意義の明確化。 													
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>早稲田大学国際部、理工学総合研究所の事務的支援の基に、運営の実務は、相手国責任者の所属大学であるノートン大学と早稲田大学総合研究機構ユネスコ世界遺産研究所および理工学術院建築学科中川武研究室がその緊密な協力のもとに担当した。</p>													
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="text-align: center;">内容</th> <th style="text-align: center;">金額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>外国旅費（日本側）</td> <td style="text-align: right;">31,200 円</td> </tr> <tr> <td>備品・消耗品購入費</td> <td style="text-align: right;">0 円</td> </tr> <tr> <td>その他経費</td> <td style="text-align: right;">145,389 円</td> </tr> <tr> <td>外国旅費・謝金等に係る消費税</td> <td style="text-align: right;">2,496 円</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">合計</td> <td style="text-align: right;">179,085 円</td> </tr> </tbody> </table>	内容	金額	外国旅費（日本側）	31,200 円	備品・消耗品購入費	0 円	その他経費	145,389 円	外国旅費・謝金等に係る消費税	2,496 円	合計	179,085 円
内容	金額													
外国旅費（日本側）	31,200 円													
備品・消耗品購入費	0 円													
その他経費	145,389 円													
外国旅費・謝金等に係る消費税	2,496 円													
合計	179,085 円													
<p>(カンボジア) 側</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="text-align: center;">内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>セミナー会場提供</td> </tr> <tr> <td>カンボジア国内研究者旅費</td> </tr> </tbody> </table>		内容	セミナー会場提供	カンボジア国内研究者旅費									
内容														
セミナー会場提供														
カンボジア国内研究者旅費														

7-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

平成 26 年度は実施していない。

8. 平成26年度研究交流実績総人数・人日数

8-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣	日本 〈人/人日〉	カンボジア 〈人/人日〉	ベトナム 〈人/人日〉	ラオス 〈人/人日〉	タイ 〈人/人日〉	ミャンマー 〈人/人日〉	中国(第三国) 〈人/人日〉	合計 〈人/人日〉
日本 〈人/人日〉		9/72 (10/99)	1/3 (7/97)	4/22 (1/1)	5/13 ()	1/8 (1/12)	1/5 ()	21/123 (19/209)
カンボジア 〈人/人日〉	()		()	5/35 ()	(1/1)	()	()	5/35 (1/1)
ベトナム 〈人/人日〉	()	()		1/8 ()	(1/1)	()	()	1/8 (1/1)
ラオス 〈人/人日〉	()	()	()		(1/1)	()	()	0/0 (1/1)
タイ 〈人/人日〉	(1/5)	()	()	2/14 ()		()	()	2/14 (1/5)
ミャンマー 〈人/人日〉	()	()	()	()	()		()	0/0 (0/0)
中国(第三国) 〈人/人日〉	()	()	()	()	()	()		0/0 (0/0)
合計 〈人/人日〉	0/0 (1/5)	9/72 (10/99)	1/3 (7/97)	12/79 (1/1)	5/13 (3/3)	1/8 (1/12)	1/5 (0/0)	29/180 (23/217)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

8-2 国内での交流実績

1	2	3	4	合計
(1/2)	(7/21)	()	(2/4)	0/0 (10/27)

9. 平成26年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	0	
	外国旅費	4,238,377	
	謝金	0	
	備品・消耗品 購入費	1,654,108	
	その他の経費	619,515	
	外国旅費・謝 金等に係る消 費税	288,000	
	計	6,800,000	
業務委託手数料		680,000	
合 計		7,480,000	

10. 平成26年度相手国マッチングファンド使用額

本事業は、該当しない。